

2011/11/22

S.Ashina

\*宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』（岩波書店）  
の後半へ

< 2010 年度 >

はじめに—— 問題の所在

序章 使徒パウロの基本的視座

第 I 部 ヨーロッパ精神におけるローマ書十三章

——ローマ帝国の時代から二つの大戦の時代まで

- 1 古代・中世教会の積義
- 2 宗教改革とその周辺
- 3 近代国家論とローマ書十三章
- 4 二つの大戦の時代
- 5 中間的考察

< 2011 年度 >

第 II 部 近代日本思想史におけるローマ書十三章

——明治期プロテスタンティズムから太平洋戦争の時代まで

まえおき

- 6 プロテスタント宣教師
- 7 明治キリスト教のローマ書十三章
- 8 大正デモクラシーとローマ書十三章
- 9 天皇制ファシズム確立期のキリスト教
- 10 太平洋戦争の只中で

終章 反省と展望

\*「第 II 部 まえおき」から

1. 「日本におけるプロテスタント宣教」の歴史的背景
  - ・ 開国
  - ・ 天皇制国家の確立過程と並行する歩み
2. 大日本帝国憲法（1889）と教育勅語（1890）のイデオロギー
  - ・ 万世一系の天皇の神聖性と不可侵性（教義→法）
  - ・ 欽定憲法：日本臣民としての権利＝天皇の恩恵としての権利 cf. 基本的人権  
信教の自由
  - ・ 国民道徳の規範：忠君愛国、近代法の形態をとった憲法とセットとなる「安全装置」

臣民の自発的な奉仕という体裁

(自発性という強制)

↓

ナショナリズムと結びついた政治宗教としての天皇制

cf. ビザンツ

3. ローマ書十三章の問題は、「宿命的なテーマ」となる。 (争点としてのロマ書)
  - ・内村鑑三の不敬事件から、1930年代の超国家主義の時代へ
  - ・「日本的キリスト教」の試み (再考の必要性)
4. 近代日本におけるローマ書十三章の受容史という研究課題
  - ・素材：ローマ書十三章に関する注解書、説教、神学論文など  
実践的注釈  
キリスト教会やキリスト者個人の態度決定や意見表明
5. 時代区分
  - ・前史：明治期および大正期
  - ・天皇制ファシズムの時代（焦点）：1930年代および1940年代  
(日本のキリスト教の現状の理解へ)
6. 宮田の視点→近代日本の精神史の解釈における索出的意義  
heuristisch 発見的
  - ・国家権威の相対化の有無・程度。神による、世俗的制度としての
  - ・キリスト教者の服従の限界付け。国家についての冷静かつ批判的な分析・理解と良心の信仰的決断 (無教会の伝統の意義)
7. 臣民の服従＝無限責任を要求する精神伝統と国体思想。これが天皇制に集約された。  
(この伝統はいかに作られたか)

#### <参考文献>

- ・土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社。
- ・古屋安雄・大木英夫『日本の神学』ヨルダン社。
- ・網野善彦『「日本」とは何か』講談社。
- ・小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社。